关于现代日语名词若干问题的研究

周星◎著

GUANYUXIANDAIRIYU
MINGCIRUOGANWENTI
DEYANJIU

东南大学出版社
Southeast University Press

关于现代日语名词若干问题的研究

周　星　著

东南大学出版社
·南京·

图书在版编目(CIP)数据

关于现代日语名词若干问题的研究/周星著. —南京:东南大学出版社,2008.10
ISBN 978-7-5641-1417-6

Ⅰ.关… Ⅱ.周… Ⅲ.日语—名词—研究 Ⅳ.H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 157380 号

关于现代日语名词若干问题的研究

著　　者	周　星	责任编辑	刘　坚
电　　话	(025)83793329	电子邮件	liu-jian@seu.edu.cn
出版发行	东南大学出版社	出 版 人	江　汉
社　　址	南京市四牌楼 2 号	邮　　编	210096
销售电话	(025)83793191/57711295(传真)		
网　　址	http://press.seu.edu.cn	电子邮件	press@seu.edu.cn
经　　销	全国各地新华书店	印　　刷	溧阳市晨明印刷有限公司
开　　本	850mm×1168mm　1/32	印　　张	4.875　字　　数　140 千
版　　次	2008 年 10 月第 1 版		2008 年 10 月第 1 次印刷
书　　号	ISBN 978-7-5641-1417-6/H·182		
定　　价	15.00 元		

* 未经本社授权,本书内文字不得以任何方式转载、演绎,违者必究。
* 东大版图书若有印装质量问题,请直接与读者服务部联系,电话:025-83792328。

作 者 的 话

任何一种语言中都存在着数量庞大的名词。名词能够表达自然界和人类社会中天地万物和各种事件的名称，具有丰富多彩的语法功能，在语言表达的基本单位之一——句子中发挥着重要的不可或缺的作用。因此，名词研究的重要性是再怎么样强调也不为过的。

本书吸收了国内外学术界关于现代日语名词的先进研究成果，通过运用传统的语言学理论以及正在成为现代语言学主流理论的认知语言学（包括认知语义学和认知语法）理论和研究方法，从词汇学、语义学和句法学的角度对有关现代日语名词的若干问题进行了综合性的研究和分析。

第 1 章首先分析研究了名词的词性和性质，对名词的分类方法以及名词的次分类作了探讨，然后作为个案研究对日语的组织集团名词作了分类，把日语的组织集团名词分为三类并加以分析和论述。最后把一部分名词所具有的各种丰富多彩的性质分为动词性、形容词性、副词性和感叹词性加以论述，指出了一部分名词在词性上跨类的现象。

第 2 章从词组学和语义学的角度，对名$_1$＋の＋名$_2$ノ格名词词组作了分析，并使用认知语义学的理论和方法对名$_1$＋の＋名$_2$ノ格名词词组的语义解释作了探讨。

第 3 章从形态学和语义学的角度，研究了名词中的一个重要组成部分——复合名词。在区分了复合词和词组的不同性质的基础上，对日语中的名＋名型复合名词和名＋动型复合名词的结构和语义解释等问题作了分析。然后对名＋动型复合名词造词时来

自于「非受格性假説」的「外論元不能進入復合詞」原则作了分析，使用具体词例指出了这一原则并不能涵盖所有的名＋动型复合名词这一不足之处。同时还对复合词构词中的「右側中心詞規則」作了探讨，指出这一规则只适用于复合词的形式方面，而不像一些学者所说的那样适用于复合词的语义结构。

第4章从句法学和语义学的角度，研究了日语的语义格体系。首先从与语义格的关系出发对日语动词作了分类，然后对日语语义格体系中的一部分语义格作了具体分析和研究。一般认为日语的デ格名词在句中表示各种意思，但通常是任意格，并不是强制格。本章通过举例和分析指出，具体句子中表示工具、材料和状态的デ格名词在一定条件下是作为强制格使用的，如加以删除，就会产生语义不通的错句。

尽管本书对现代日语名词的一些问题作了比较详尽的研究，但是名词研究中还存在着大量未解决的课题，尤其是名词造词时生成新词的机制以及复合名词造词中的概念合成机制、名词的语法功能和名词的表达能力等问题需要作进一步的深入探究。

本书是在我的博士学位论文的基础上经过修改、增删和完善而成的。在本书付梓之际，首先要特别感谢导师沈宇澄教授。在博士学位论文的选题、写作、修改和定稿的过程中，自始至终得到了沈老师的悉心指导和热忱帮助。沈老师高尚的品格和严谨的治学精神使我受益匪浅，值得我认真学习和实践。

我还要特别感谢我攻读硕士学位时的导师李进守教授。二十多年前，是李先生引导我跨入科学研究的神圣殿堂，使我领略了日语词汇学这一学术研究领域的无限魅力并愿以终生的努力来为日语词汇学的研究作出自己的贡献。

在多年的学术研究工作中，我很荣幸地得到了所供职的上海外国语大学日本文化经济学院历任领导和全体教职员的倾力相助。在他们的无私帮助和大力支持下，我得以愉快地并顺利地开

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

展学术研究工作并取得点滴成绩。谢谢同事们。

本课题在研究过程中得到了上海外国语大学日本文化经济学院皮细庚教授、许慈惠教授、戴宝玉教授、陈小芬教授、同济大学外国语学院吴侃教授、华东师范大学外语学院高宁教授等各位老师的积极鼓励和具体指导。他们对本课题既作了充分的肯定，也中肯地指出了所存在的不足之处。他们的宝贵意见显著地提升了本课题的质量。谨向他们表示衷心的感谢。

鉴于课题的广度和深度，以及本人的能力有限，书中错误和不妥之处在所难免，敬请学术界同仁和读者不吝指正。

周　星

2008 年 8 月

要　旨

言語における名詞の量は膨大なものである。名詞は、自然界と人間社会の万物や事態の名称を表現することができ、また、いろいろな文法的機能も有しており、言語の基本的な単位の一つである文中において重要な働きをしている。したがって、名詞研究の重要性はどんなに強調しても強調しすぎることはないであろう。

本書においては、現代日本語名詞に関する国内外の先行研究の成果を踏まえて、伝統的な言語理論と現代言語理論の主流となりつつある認知言語学(認知意味論、認知文法)理論を応用することによって、語彙論、意味論、統語論の観点から現代日本語名詞に関する諸問題について総合的な考察を進めてきた。

本書の第1章においては、名詞の品詞分類と性質、また、名詞分類の手法について検討し、名詞の下位分類及びケーススタディとしての組織・集団名詞の分析を試みた。組織・集団名詞を三種類に分け、具体的に分析した。また、名詞の多彩な性格を、動詞性、形容詞性、副詞性、感動詞性に分けて検討した。

本書の第2章においては、言語単位の一つで名詞中心の連語である、名1＋の＋名2ノ格名詞連語について連語論と意味論の立場から考察した。名1＋の＋名2ノ格名詞連語の意味関係を具体的に分析し、名1＋の＋名2ノ格名詞連語の意味解釈について認知意味論の手法を使用しながら検討した。

本書の第3章においては、形態論と意味論の立場から、名詞の中の重要な一種類である複合名詞を中心に考察した。まず、複合名詞と連語の境界を明らかにした上で、名＋名型複合名詞、名＋動型複合名詞の構成及び意味解釈の問題について検討した。それから、名＋動型複合名詞の構成における「外項は複合語に入れない」原則という「非対格性の仮説」からきた規則の不備を検討し、そういう原則はすべての複合語をカバーできないことを指摘した。また、複合語の語形成あるいは語構造におけるいわゆる「右側主要部規則」も複合語の形式に適用されるが、複合語の意味構造に適用されない、ということも指摘した。

本書の第4章においては、統語論と意味論の立場から、名詞の深層格の格体系について考察した。まず、名詞の文中における深層格との関連で動詞を分類し、それから、名詞の文中における文法的役割と意味的役割の一部について分析した。

目　次

はじめに…… 1
1　本研究の意義と目的 …… 1
2　構成と内容 …… 3
3　用例 …… 4

第1章　名詞の性質と認定…… 5
1　名詞の性質 …… 5
1.1　名詞の性質に関する先行研究 …… 5
1.1.1　大槻文彦の観点 …… 6
1.1.2　山田孝雄の観点 …… 6
1.1.3　橋本進吉の観点 …… 8
1.1.4　時枝誠記の観点 …… 10
1.1.5　現代国語学者の観点 …… 11
1.2　名詞の認定…… 12
1.3　名詞の性質…… 15
2　名詞の下位分類…… 16
2.1　名詞分類に関する先行研究…… 17
2.1.1　市川保子の分類 …… 17
2.1.2　鈴木康之の分類 …… 17
2.1.3　益岡隆志・田窪行則の分類 …… 18

2.1.4　寺村秀夫の分類 …… 19
2.2　寺村分類方法の問題点 …… 21
2.3　いわゆる組織・集団名詞について …… 22
2.4　筆者の分類…… 27
2.5　名詞の多彩な性格 …… 28
2.5.1　名詞の動詞性 …… 29
2.5.2　名詞の形容詞性 …… 29
2.5.3　名詞の副詞性 …… 30
2.5.4　名詞の感動詞性 …… 32
3　まとめ…… 32

第2章　「名$_1$＋の＋名$_2$」(ノ格名詞連語)の意味構造について …… 34
1　「名$_1$＋の＋名$_2$」という言語単位 …… 34
2　ノ格名詞連語の意味関係…… 35
2.1　ノ格名詞連語に関する先行研究 …… 35
2.1.1　鈴木康之の分類 …… 36
2.1.2　森田良行の分類 …… 37
3　筆者の分類…… 40
3.1　森田分類への再分類 …… 40
3.2　意味解釈の観点による分類…… 44
3.2.1　統語的意味性を持つもの…… 45
3.2.1.1　統語的意味性とは何か…… 45
3.2.1.2　統語的意味性のノ格名詞連語 …… 45
3.2.2　比喩的意味性を持つもの…… 46
3.2.2.1　比喩的意味性とはなにか …… 46

3.2.2.2　メタファー …… 48
3.2.2.3　メトニミー …… 50
3.2.2.4　シネクドキー …… 51
3.2.3　語用的意味性を持つもの …… 53
3.2.3.1　語用的意味性とはなにか …… 53
3.2.3.2　語用的意味性を持つものの範囲 …… 54
4　まとめ …… 55

第3章　複合名詞の語構成、意味構造と意味解釈 …… 56
1　語と複合語 …… 56
2　複合語と連語の区別 …… 60
2.1　形態面における語と連語との区別 …… 61
2.2　意味面における複合語と連語との区別 …… 63
3　統語的要素を持つ複合語について …… 66
4　複合名詞の構造と意味関係 …… 69
4.1　複合名詞構成成分の品詞性 …… 69
4.2　名$_1$＋名$_2$ 型複合名詞の意味関係に関する先行研究 …… 70
4.2.1　竝木崇康の分類 …… 70
4.2.2　ゆもとしょうなんの分類 …… 71
4.2.3　名$_1$＋名$_2$ 型複合名詞の意味関係 …… 73
5　名＋動型複合名詞 …… 75
5.1　名＋動型複合名詞の意味関係 …… 75
5.2　主述関係をもつ名＋動型複合名詞について …… 77
5.2.1　「非対格性の仮説」と名＋動型複合名詞 …… 79
5.2.2　「外項は複合語に入れない」原則について …… 81
6　内心複合名詞 …… 85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6.1　内心複合名詞とはなにか …… 85
6.2　内心複合名詞と右側主要部原則 …… 87
6.3　複合語における右側主要部規則の問題点 …… 89
6.4　複合語後置成分の重要性 …… 92
7　複合名詞の意味解釈…… 93
7.1　統語的複合名詞の意味解釈…… 94
7.2　比喩的複合名詞の意味解釈…… 95
8　まとめ…… 97

第4章　名詞の格について …… 99
1　名詞の格体系…… 99
2　伝統的な格の概念と表現形式 …… 103
3　深層格 …… 104
3.1　深層格の性質 …… 105
3.2　深層格に関する先行研究及びその分類 …… 107
3.2.1　深層格に関する先行研究 …… 108
3.2.1.1　フィルモアの分類 …… 108
3.2.1.2　井上和子の分類…… 108
3.2.1.3　村木新次郎の分類 …… 108
3.2.2　筆者の分類 …… 109
4　深層格記述のための動詞分類 …… 109
4.1　動詞分類に関する先行研究 …… 109
4.1.1　金田一春彦のアスペクト視点による動詞の四分類 …… 109
4.1.2　仁田義雄のテンス・アスペクト視点による動詞の三分類 …… 110

4.1.3　影山太郎の「非対格性の仮説」による自動詞の二分類 …… 111
4.2　筆者の分類 …… 112
4.2.1　動態動詞 …… 112
4.2.2　状態動詞 …… 113
4.2.3　属性動詞 …… 114
4.2.4　心理動詞 …… 115
5　深層格の記述 …… 116
5.1　動作主 …… 116
5.1.1　動作主の意味特性 …… 116
5.1.2　動作主の表現形式 …… 120
5.1.2.1　ガ格動作主 …… 120
5.1.2.2　デ格動作主 …… 120
5.1.2.3　ニ格動作主 …… 121
5.1.2.4　カラ格動作主 …… 122
5.2　経験主 …… 122
5.3　状態主 …… 123
5.4　属性主 …… 123
5.5　対象 …… 124
5.5.1　ガ格対象 …… 124
5.5.2　ヲ格対象 …… 125
5.5.3　ニ格対象 …… 127
5.6　道具 …… 129
5.7　材料 …… 130
5.7.1　デ格材料 …… 130
5.7.2　カラ格材料 …… 131

5.8 状態 …… 133
6 まとめ …… 134

終わりに …… 135

参考文献 …… 137

はじめに

1 本研究の意義と目的

語彙と文法は言語を構成する二大システムである。語彙は個々の語からなるのであるが、語というものは、固有の語彙的意味を持っていると同時に、文法的性質も持っている。語の文中における他の語とどのような関係で結ばれるのかという文法的性質に基づいて分類されるのが品詞である。品詞の中で一番重要なものは名詞と動詞であるとされている。名詞と動詞は言語における基本的な語彙―文法範疇であり、文という基本的な言語表現単位を形成するもっとも基本的な要素でもある。一般的に言えば、文の基本的構造は動詞句であるが、動詞句というものは主要部である動詞成分と、それによって規定される名詞成分によって形成される。名詞と動詞の関係について言えることは、名詞は動詞の支配を受けながら動詞と相互補完的にかかわることによって文というものを形成する、ということである。したがって、名詞は動詞と同じように文を形成するうえで必須不可

欠の要素であると言える。文の構造を解明するにあたって、これまで盛んに行われてきた動詞の研究は確かに重要であるが、一方、動詞しか研究しないのでは言語研究の全体性が欠けてしまう恐れがあるので、動詞と組み合わさって文中で重要な役割を果たす名詞の研究も重視し、名詞の立場から文法システムを眺める必要があるのではないかと思う。そうしてはじめて、日本語の語彙システムと文法システムの全面的な解明が可能になるのである。

これまで、長期間にわたって日本語学界では動詞の研究に力を注いできており、動詞研究においては多数の見事な成果を生むに至った。しかし、動詞研究に比べると、名詞の研究はいまだにそれほど重視されていない観がある。これまで重ねて研究されてきた名詞に関するテーマとして、名詞の格体制(が格、を格、に格など)や連体修飾構造における名詞の実態や名詞述語文などがある。しかし、全体として名詞に関する研究の累積の層がまだ薄いと言えるであろう。その原因としては、動詞に比べて名詞の有する文法的性質は相対的に目立たない上に、奥深いところに隠されていて表層にははっきり現れていないので、研究が難しいということが挙げられるであろう。近年来、このような状態はいささか改善されてきてはいるが、全体的に見れば、系統だった名詞の研究は少ないし、掘り下げた研究もあまり見られないのが現状である。したがって、一歩進んで日本語名詞を研究することは日本語の語彙システムと文法システムの解明や日本語教育にとって理論的にも実践的にも極めて重要な意義があると考えられる。

2 構成と内容

本書は四つの章からなっている。その構成と内容概要は以下の通りである。

第1章は、名詞の品詞分類と性質について考察することにする。内容は、名詞分類の手法に関する分析、名詞の下位分類及びケーススタディとしての組織名詞に関する具体的な分析などである。

第2章は、言語単位の一つで名詞中心の連語である、名$_1$＋の＋名$_2$ノ格名詞連語について意味論の立場から考察することにする。内容は、名$_1$＋の＋名$_2$ノ格名詞連語の意味関係、意味解釈などである。

第3章は、形態論と意味論の立場から、名詞の中の重要な一種類である複合名詞を中心に考察することにする。内容は、複合名詞と連語の境界、名＋名型複合名詞と名＋動型複合名詞の構成、意味解釈などである。

第4章は、統語論と意味論の立場から、名詞の格体系について考察することにする。内容は、名詞の文中における深層格との関連での動詞分類、名詞の文中における文法的役割と意味的役割などである。

以上に述べたような構成と内容及び問題意識を持ちながら、現代日本語名詞に関する国内外の先行研究の成果を踏まえて、伝統的な言語理論と現代言語理論の主流となりつつある認知言語学(認知文法、認知意味論)理論を応用することによって、語彙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com